

宣化より帰る

佐賀県 保利 電

終戦の詔勅があったのは、私が蒙古政府宣化省宣化県参事官の時で、日系職員一同とともに拝聴した。激こうして抗戦を主張する徒輩もいたが、森一郎宣化省次長（故人、引揚げ後、佐賀県、副知事）の詔書必謹の訓示があり、その後は、軽挙妄動する者はなくなつた。その頃、家内は出産間際であつたが、なかなか出産できず、たいへん気をもんだが、私は県の責任者として家庭のことはかまっておれずてんでこ舞の忙しさであつた。

家内は十七日になつてやっと男児を出産したが、体重は四キロ以上あつたと思う。

かねて在留邦人に対しては、領事館より非常警報が鳴つたら、宣化駐在の日本軍警備隊に避難するよういわれており、一、二度警報が鳴つたらしいが、私の家では、家内が動けないため避難することもできず、何も知らな

い二人の娘（満五歳と二歳）は、庭のブランコに乗って遊んでいる始末で真に辛い思いであつた。家内はいよいよのときは私が与えていた手榴弾か、青酸加里で母子共に自決する覚悟を決めていたらしかった。

二十二日、領事館から、在留邦人は北京への引揚げ列車が到着するから、午前十時までに宣化駅に集合するよう通報があつた。

宣化駅は引揚げ邦人でプラットホームはあふれるばかりであつたが、引揚げ列車は予定の時刻になつてもなかなかこない。午後遅くなつて、張家口方面から引揚げ邦人を乗せた列車が到着したので皆、われさきにと必死で乗りこんだ。深夜、ようやく発車した列車を私は見送り、県城内に引き返すときは、あちこちに銃砲声や機関銃声が鳴り響いたが、私は妻子を送り出し安ど感からか、それらの銃砲声も子守唄のように聞こえて、恐怖感は起こらなかつたような気がする。城内に戻り、憲兵分隊と相談したところ、警備隊もまもなく引揚げると、憲兵隊も明朝早く引揚げるといふ。

翌朝、省長一行とともにトラックで下花園に向かっ

た。南口駅発最終の軍用列車に便乗して北京に向かった。

北京に到着して私は次長達と別れ叔父宅に行った。深夜、宣化駅を発車した妻子をのせた無蓋列車は、まもなく大雨に見舞われ、皆ズブ濡れになり、家内は死人の如く横たわり、独身の坂本警務指導官に介護され、同車中の乳の出る人から貰い乳をして貰っていたが、やがて乳をくれていた人も乳が出なくなり、坂本君がつくつてくれた人工乳でどうかしのいでいたらしい。大小便等も鉄の梯子から地上に降りて始末しなければならず、産後間のなかった家内は、それが最大の苦しみだった。かくて列車が進むうち、引揚げ列車の先行をしていた日本軍の装甲列車が、宣化泉懐来駅付近で、八路軍の襲撃にあい、さいわい死者はなかった模様だが、線路が爆破されたので、それを修理して出発、翌日午後三時頃北京に着した。

親類、知人等のない大部分の引揚げ者は天津の芙蓉小学校、松島小学校に収容されて苦難の共同生活をした後、天津の旧日本軍の貨物廠に移されたが、私たちは、

直接貨物廠に収容された。筆舌につくしがたい苦難の収容所生活の後、博多港に着いたのは十二月十五日であった。

青雲の志を抱いて渡航そして引揚げ

福島県 神事 重人

友にすすめられ、北京にあった電力鋳業(株)に応募し渡航したのは、十二年四月だった。この会社は発電所、変電所の工事と機械工具の販売をしていた。私は、販売部に勤務し、昭和十三年、太原市に出張所開設、昭和十四年五月から十六年十二月まで太原に勤務、この間、日本通運のタイピストだった妻と結婚し、北京転勤、十七年長男出産、妻の両親のもとへ旅行し、北京へもどったが、重要産業要員だから訓練校へ入所のことと総領事館の命があった。

三か月あまりの軍事訓練後、日鉄鋳業武安鋳業所に配属、大行山脈の巨大な鉄鉱石の山に入った。不足した鉄